

# 薬史レター

(薬史学会通信改題)

日本薬史学会

JSHP



第 47 号

2008 年 1 月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局  
TEL (03)3817-5821 FAX (03)3817-5830 URL <http://yakushi.umin.jp/>

## 第 38 回国際薬史学会に出席して

三 澤 美 和

(日本薬史学会理事、星薬科大学薬理学教室)

今年 2007 年 9 月 19 日～22 日、スペインのセビリア市で第 38 回国際薬史学会が開催され、出席してきた。日本薬史学会に 1988(昭和 63)年 2 月に入会してからほぼ 20 年経過するが、国際薬史学会への参加ははじめてである。本年 2007 年に日本薬史学会が国際薬史学会に 22 番目の国として加盟した。アジアからは初めての加盟である。日本薬史学会のほかの役員の方は都合で今年は出席されないということで、だれかが日本から顔を出さねばならない、という気持ちで出掛けた。

セビリアは遠かった。朝早く家を出て成田へ行き、直通便はないので、成田空港から航空機でアムステルダムまで行き、乗り換えてマドリードへ夜遅く到着した。そこで一泊し、翌日マドリードから特急高速列車で 2 時間半かかってようやくセビリアにたどり着いた。ヨーロッパの果ての果てにやってきた感じがした。日本にいたとき、学会会場は Hotel NH Central であることは国際薬史学会のホームページに出ていたが、ホテルの所在地の地図は最後まで画面では準備中として不明であった。現地に行って地図を買ってもそのホテル名は載っておらず、タクシーでホテル名を言って、ようやく学会場にこれもやっとたどり着いたという思いがした。

あらかじめ山川浩司会長からの委嘱状が本部の役員会に届いていたので、日本薬史学会代表として役員会に出席した。29 名の各国からの役員(うち 11 名が女性)から構成され、会長選挙があったが、フランス薬史学会会長の Olivier Lafont 氏が再選された。日本の加盟が紹介されたほか、次期の国際薬史学会は 2 年後の 2009 年 9 月 16～19 日にオーストリア国ウィーン市で開催されることが決定した。役員

### 2008年の総会および年会の日程

日本薬史学会総会 4月19日(土) 東京大学薬学部講堂

日本薬史学会年会 11月15日(土) 近畿大学薬学部

詳細は次号に掲載

昼食会が外のレストランで催され、オランダ、ドイツ、ニュージーランド、イギリスなどの方々と  
なごやかに話し合った。

学会はスペインお国自慢のギター演奏で幕をあ  
けた。学会発表は、特別講演 1、シンポジウム 2、  
パネルディスカッション 1 を含み、口頭発表 96、  
ポスター発表 27 の計 124 演題であった。国別  
には、スペイン 22、ドイツ 14、フランス 8、ル  
ーマニア 8、トルコ 8、イタリア 7、ポーランド 7、  
セルビア 5、メキシコ 5、ギリシャ 4、ポルトガ  
ル 4 演題など、約 30 カ国から発表があり、300

名ほどが参加した。内容は多方面にわたりまとめることは難しいが、英語だけでなく、フランス語、ス  
페인語、ドイツ語での発表も多く、自由奔放であった。セビリアはアンダルシア地方に位置し、イス  
ラム文化が溶け込んだ独特な建物が多く残っているが、シンポジウムの 1 つに土地柄を反映して「ムス  
リムの薬学」があったのは印象的だった。

日本からの発表は、私が「第一次世界大戦後のドイツ化学界への寄金に謝意を込めたドイツから星一  
への数々の褒賞品」と、ロンドン大学経済経営学部博士課程大学院生の梅村真希さんの発表の 2 つであ  
った。梅村さんは日本薬史学会会員、英国薬史学会会員であり、長年米国や英国で研究をされている。  
国際薬史学会が公募していた Research Fellowship Award に「日本の医薬品の歴史」の研究で応募さ  
れ、見事に受賞されて、この学会で授賞式を兼ねて受賞記念の講演をされた。梅村さんは最近日本に一  
時帰国された折、星薬科大学の私の部屋を訪ねられ、長時間お話しできた。これも縁というものであろ  
う。

学会は、2 年後にウイーンでということ散会したが、日本薬史学会の皆様には次回は是非大勢参加  
していただけたら喜ばれるのではないかと思う。



## 西洋医学教育発祥百五十年記念国際医学史科学史会議と 平成 19 年度日本薬史学会に参加して

オランダ海軍二等軍医ポンペ(J. L. C. Pompe van Meerdervoort)が長崎奉行所西役所に設けられた  
医学伝習所で西洋式の体系立った医学教育を始めたのは 1857 年 11 月 12 日(当時の暦で安政 4 年 9 月  
26 日)であった。文久元年(1861)には、日本で初めての西洋式病院を小島郷に建設して、養生所と名付  
けられ、医学伝習所も医学所と改められて同地へ移転して附属病院をもつ medical school となった。  
その後、幾度かの学制改革により名称が変わったが、今日の長崎大学医学部へと発展した。明治 24 年  
(1891)浦上の地に新築移転したが昭和 20 年 (1945)8 月 9 日、原子爆弾投下の爆心地に近く、施設は破  
壊され、学生を含めた医療人の尊い命が失われた。戦後の厳しい時代を復興、再建が進められて現在は  
緑の美しい医学部キャンパスとなったのも平和の賜物である。

今年はまさに、西洋医学教育発祥 150 年、長崎大学医学部創立 150 周年の記念すべき年にあたるの  
で 11 月 9 日(金)と 10 日(土)午前に西洋医学教育発祥 150 年記念国際医学史科学史会議(以下、国際学  
会と略)が、10 日午後に記念式典が医学部記念講堂で盛大におこなわれた。

11日(日)には平成19年度日本医史学会秋季大会、平成19年度日本薬史学会年会、2007年度洋学史学会秋季大会がポンペ会館内の三室で、シンポジウムA、B、C、と市民公開講座が記念講堂で平行して開催された。この三日間の講演、式辞の中で幾度か耳にしたのは「医師は自らの天職をよく承知していなければならぬ。ひとたびこの職務を選んだ以上、もはや医師は自分自身のものではなく、病める人のものである。もしそれを好まぬなら、他の職業を選ぶがよい」というポンペの言葉である。これは医学部玄関ホールのポンペ顕彰記念銘板に刻まれている。

国際会議は出島を中心とした日欧の医学、科学技術交渉史を長年にわたって研究されてきた現代のジャパノロジスト達をオランダ、ドイツより迎えて行われた。その中のライデン大学、ハルメン・ポイケルス教授、オランダ・ベルギー薬史学会会長アネット・I・ピールマン博士の御二人は1995年9月の第32回国際薬史学会議(パリ)の後の「第4回ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅」(ベルギー経由でオランダを訪問)の際、ライデン、デン・ハーグ、ゴータなどでの見学の時にご案内頂き大層お世話になり(薬史学通信 No.22 1996年2月を参照)、12年振りの再会であった。

この記念すべき国際会議に出席しての印象の一端を記す。

- 1) ポンペの医学伝習所開設の成功は幕府の要請による第二次海軍伝習隊の一員としてオランダ海軍が長崎で日本人医師の医学教育担当者として相応しいポンペを選考し、任命したことである。彼は出身のユトレヒトの軍医学校のカリキュラムを土台として、長い航海中に講義ノートを作成して準備して来航した。この点が出島の商館医として彼以前に来航して医学、植物学に功績のあったツェンベリー、シーボルトとの大きな違いである。

シーボルトの鳴滝塾は長崎奉行が認めた私塾に過ぎなかったが、医学伝習所は鎖国時代末期に幕府が掲げた国家プロジェクトの一つであった。

- 2) オランダ人教師を助けた松本良順の功労も極めて大きかった。

江戸で蘭方医の家に生まれ、幕府に医官として出仕していた松本良順は伝習所への留学を命ぜられた。ポンペは初対面で彼が伶俐で理解力に富む人物であることを見抜き、学生の秩序と規律の監督を依頼した。西洋医学の学習の基礎となる物理、化学の必要なことを諸藩からの留学生に理解させること、解剖実習などカリキュラムの進行に応じて長崎奉行との折衝が必要になった場合の交渉でも松本良順はポンペの力となった。本項中、ポンペと良順の初対面のくだりについては「ポンペ日本滞在看聞記—日本における五年間—」(沼田次郎、荒瀬進 共訳)の文章の一部を引用させて頂いた。

- 3) ポンペは洋式の活字印刷による薬理学の講義の手引書を出島の印刷所で1862年に印刷させた。これについては芳本教授が解説された。

ポンペの化学の講義録は「朋百舎密書」として残された。これは日本人が筆写したオランダ語のものが松江日赤病院で発見され、芝哲夫名誉教授訳「ポンペ化学書—日本最初の化学講義録—」として出版されているが、芝先生はポンペ離日後のハラタマの分析究理所、大阪舎密局への発展、な

## 西洋医学教育伝習所150年記念冊



日本医史学会 酒井 シヅ理事長

どもも話された(「ポンペ化学書」は薬史レター第42号、7頁に紹介)。

- 4) 日本薬学会百年史年表(1980)は1857(安政4年)より始まっている。その理由としてポンペにより始められた西洋医学教育で体系的、科学的な薬物の教育の第一頁がひらかれたことを日本薬学会百年史編纂委員長であった宗田一先生が強く主張されたことによる。

(末廣 雅也)

## 11月11日のシンポジウムA、B、Cを聞いて

シンポジウムA、B、Cと平行して日本医史学会、薬史学会、洋学史学会がポンペ会館の夫々の部屋で開催されており、いずれも魅力的な演題が並んでいた。どれを聴講するかは参加者の選択に任せられ、プログラムと時間をにらみつつ、記念講堂とポンペ会館をかけめぐった人々も多かったと思われる。筆者は、シンポジウムのすべてを聴講できたわけではなく、かなりひとりよがりの感想になるが、一シンポジウムに一演題だけを取り上げて記す。しかし聴講できたすべての演題からは、広く学ぶことができ、充実した示唆に富む内容に感銘することが多かったことを付記したい。

### シンポジウムA 「長崎遊学」

概要：江戸時代、全国各地の若者は夢や希望を抱いて長崎に遊学した。ヨーロッパや中国の医学者と出会い、最新の西洋医学や中国医学を学び、新たな考え方を身につけて帰郷し、活躍した。彼らの夢は実現したのか、何をやり遂げたのかについて、8人の演者による講演があった。

#### 「佐藤舜海(尚中)の長崎遊学の意義」 酒井シヅ

舜海は義父佐藤泰然の次男の松本良順とは義兄弟となる。本演題は既に10日に講演された酒井シヅ「松本良順(1832-1907)：ポンペ・ファン・メールデルフォールトの協力者」の続編ともいべきものであった。

舜海は義父泰然の反対を押し切って万延元年(1860)長崎へ行き、ポンペに1年間学び、文久2年(1862)3月、佐倉に帰着。長崎滞在で得た西洋医学が舜海のそれまでの知識を一変させた。それについて、具体的に順天堂塾の医学教育内容の改革、各種医学書の翻訳、佐倉藩の医学所の改革、佐倉養生所の設立であり、ここでは第一に領内の窮民を寄宿させて手当をすることを目的としたとしており、そして第二に医薬分業の実施をあげている。薬剤は養生所で調剤するが医師の私宅で調剤することは禁止したという、新事実が印象的であった。舜海は明治2年11月、新政府からの依頼で明治政府へ出仕。このとき名を尚中と改め、大學東校に勤務、ポンペから学んだ医学教育を実施すべく、医学教育制度を定めた。そして東校にドイツ人教師が着任すると野に下り、私立病院としての順天堂医院を創設、先端医学追究というポンペの教えを实践、今日に続いていると述べている。御茶の水の順天堂大學付属医院薬局に14年間勤務した経験をもつ筆者には、非常に印象深い内容であったし、また佐藤尚中が医薬分業を実施したという史実は新鮮であり、当時のヨーロッパの薬局に思いを馳せる。

### シンポジウムB 「長崎と薬」

概要：長崎は薬種貿易の中心地であり、中国から豊富な種類の漢方薬とその素材が輸入される一方、ヨーロッパから漢方薬とは異なる珍奇な生薬や個々の病気に特効を持つ薬が輸入された。薬種の輸入や流通の機構は複雑であり、幕府の医官までもが関わっていたことなど、4人の演者による講演があった。

#### 「舶来の珍奇生薬」 遠藤次郎

鎖国時代の輸入生薬にオクリカンキリ、ミイラ、ベゾアルなど、変わった名前のものがいくつかあり、十年ほど前に歴史専門の若い学生がオクリカンキリは、缶詰を開ける缶切りの一種だと思っていたと語ったことがあった。長崎を経て輸入された生薬は、中国伝統医学によるものが素材も豊富で種類も圧倒的に多いので、西洋伝統医学の薬を輸入する姿勢は、これまで自分たちが持っていないものや思想を受容しようというものであったという、演者の考察は明解である。

輸入された西洋伝統医学の薬の中で、解毒薬や万能薬として注目されたテリアカ、ベゾアル石、スランガステイン、オクリカンキリ、ミイラについて、日本における受容のされ方を述べている。例えば、テリアカはその成分は初期のものは1処方中の薬物数が多く100種以上に達するものもあり、後期のものは少なく4種類や、1種類であったりする。日本における受容は、極端に多い薬味を減らし、日本で代用できる薬味に変更する方向を採っているということであり、テリアカに蝮蛇(マムシ)を加えているとして、強精強壯薬としてのマムシの応用はテリアカの受容と関連していると見られる、と考察されている。またミイラは瀝青(mummiā)、ミイラ(木乃伊、mumia)ミルラ(没薬、myrrh)無名異(軟マンガン鉱、MnO<sub>2</sub>)との間でしばしば混同されているが、本来はアラブ地域で万能薬として用いられていた瀝青(天然アスファルト、コールタール)であったとみられる、としている。中国医学、インド医学、ウイグル医学なども研究されている演者の、西洋伝統医学生薬の日本における受容についての考察は、印象深いものであった。

## シンポジウムC 「本草から植物学へ」

概要：鎖国体制が確立する17世紀中頃を出発点とし、日本独自の本草学への動き、リンネの分類学への受容、日本人と外国人との交流、近代植物学への転換を追及しながら、植物研究における発展の再検証を目指しているとして、5演題の講演があった。

### 「日本独自の本草学の誕生について」 W.ミヒェル

演者は9日の「Section1：オランダの日本の近代医学と薬学への貢献」で「越境と知的好奇心—近代医学へ至る道について」として総説的なポンペ来日までの医学導入について述べている。本講演はその中の具体例として本草学に焦点をあてたものである。それは、日本独自の本草学の台頭は貝原益軒の『大和本草』(1709刊)と結びつけることが定説として受け継がれてきたことへの反証であり、それを裏付けるいくつかの史実の展開と考察を述べている。

演者によれば、日本における本草学の独自の動きは、すでに1660年代に始まっているとしている。それは西洋外科手術の導入に伴う新医薬品の需要、西洋本草書の到来、国内経済の諸問題とそれに対応する幕府の政策などによるものである。8世紀以来、中国との交流を保ちながら本草の研究を続けていた日本人は、17世紀中頃以降に輸入されたドドネウスの『本草書』や『アイヒシュテットの庭園』に、中国本草書とは違う植物界を見、そして紅毛流医術の浸透により蘭方医薬品への開眼、薬草と国内資源の必要性を実感、1660年代経済問題に悩む幕府は薬草の国産化を試み、種と苗、蒸留機器の提供と薬草専門家の派遣を求める。植物は長崎の一面に栽培され、出島の敷地内には蒸留装置をとりつけた「油取家」があり、来日した薬剤師ヘックとブラウンは薬草の栽培法と利用法を教え、長崎奉行の依頼で湾内の植物調査を行った。数年間におよんだこれらの活動は、〔ミヒェル氏の論文によれば(医史学雑誌50巻3号、470頁)蒸留法の教授は成功したが植物栽培はうまくいかず、その後幕府の政策転換でこの企画は終了する〕中国本草学の限界と国内外の植物の違いを認識させており、旧来の本草学との決別を意味しているとし、17世紀に遡る日本独自の本草学は終始、中・日・蘭の図式で展開していたという大変示唆に富む講演であった。宗田一氏が、わが国最初の公式製薬伝習として1671年に通詞6名が出島で

オランダ人から製薬の実技を見学し、報告書を幕府へ提出したという史実も(日本製薬技術史の研究、70～71頁)、このような背景で捉えることによりさらに生き生きと浮かび上がってくるように思われる。

(高橋 文)

#### シンポジウム D 「薬学教育の黎明」を聴講して

木立を背景にした瀟洒な煉瓦色二階建てのポンペ会館(長崎大学医学部創立 130 周年・原爆復興 40 周年記念記念事業建築物)の二階両翼の窓はポンペ来航時の日蘭交流のさまを見事に画かれたステンドグラスで思わず足を止めてしばし仰いでから入った。

初めての三学会合同ということで、何かと準備に気を遣われた芳本 忠会長、黒田直敬事務局長のご尽力が実り、通常は医学部教授会のみに使われるというポンペ会館二階の大会議室でゆったりとした気分で参加者は薬史学会を聴講できたことを感謝したい。因みにこの会場への入場者は約 100 名とのこと。



芳本 忠 年会長

シンポジウム A、B、C が三学会に共通するテーマであったのに較べると、この会場でのシンポジウム D 「薬学教育の黎明」は文字通り、薬学だけを対象としたものであった。司会は中島憲一郎教授と山川会長、5 人の演者により充実した発表と討論が行われた。

第一席の「日本における薬学、薬剤師が誕生してから 150 年」と題する山川会長の発表を要約すると、ポンペの後任の医学伝習所教官ボードウィンは医学教育から理化学教育を分離して分析研究所を設けてハラタマを招いた。間もなく幕府は瓦解したが、新政府は大阪に舎密局を創立してハラタマが教鞭をとった。ハラタマの後任として長崎に来たヘルツの勧告により輸入薬品検査機関である司薬場が新政府により設立された。このオランダ人たちは何れもユトレヒト軍医学校出身者であって、新政府がドイツ医学導入に続いての薬学教育の黎明期に貢献したことより説きおこし、その後の 150 年間の薬学教育の変遷、長年に亘るドイツ留学より帰国した長井長義らにより創められた研究室薬学の輝かしい発展、第二次大戦後に目覚めさせられた医療薬学と薬剤師養成教育や経済界の国際化に伴っての医薬品産業の在り方へと幅広い歴史認識に基づいて現在の問題点までの概論であった。

第二席の「江戸時代の薬物教育」の米田氏該典氏(大阪大学)の講演を要約すると、慶長・元和の戦乱後に復興した大坂には国内各地からの物資が集積して、日本の経済活動の中心地となった。道修町に集まった薬種商が「薬種仲買中間」を組織して和薬改会所をつくり薬品の流通をはかった。薬剤師のいなかった時代の薬物教育は「くすり」を利用する医師と商品としての薬を扱う「薬の専門家」との間の薬物の真偽鑑別、良劣、その他の情報の提供、交換という形式で行われた。やがて、オランダ船、唐船により齎された薬も長崎から送られて道修町で取り引きされるようになった。宝暦年間には薬種の物産会が江戸、大坂で行われるようになった。

将軍吉宗の時代に科学関係の蘭書の輸入が解禁となると、それまで紅毛医学として長崎の通詞だけが学習していた西洋医学の修得を志す医師も現れ、蘭学の塾もできた。

蘭方医として高名な緒方洪庵は、江戸、大坂、長崎で修行してから大坂に適塾を開き医業と蘭学の教育に当たった。米田氏は洪庵の残した二つのくすり箱の研究にもふれた。

第三席の「明治・大正の薬学教育の中の化学教育」は富永義則教授(長崎大学環境科学部)の講演を要約すると、ポンペの来日以前に津山藩の蘭学者の宇田川榕庵は薬物学、植物学、化学の蘭書を翻訳していたが、様々の化学の用語を作り、「舎密開宗」を著した功績は大きく、その影響はポンペについて化学を学んだ上野彦馬が著した「舎密局必携」などにも及んでいた。彼は写真館を開き、日本写真の祖ともいわれた。慶応3年に長崎に来た徳島藩の長井長義は上野彦馬の家に寄寓し、写真技術を通じて化学を学んだ。

化学の教科書に関連しては、1860年にケクレがイニシアチブをとってドイツのカールスルーエで第一回国際科学者会議を開催して、当時混乱していた原子量、分子量、當量などの概念の統一が進められたことが、何故か日本の教科書では紹介されていないことを富永氏は指摘した。

更に長崎大学薬学部の起源を遡ると、明治23年設立の第五高等中学医学部薬学科が明治34年に長崎医学専門学校薬学科と改稱されている。当時の有機化学の授業内容について森永伊吉教授の講義口述録が残されている。講義録の表紙となっている当時の新聞は明治36年となっていることから、その内容は当時としては最先端のものであり、化合物名等にはドイツ語の併記があるので、教科書の原本はドイツ書と推定したと述べた。

第四席の「医薬の科学から見た日本の薬学」と題する川瀬清氏の発表を要約すると、西欧における市中薬局は薬品陳列室とラボラトリムを備えていたことを挙げて、中世以降産業革命期まで薬剤師は化学的技術を磨き、様々の発見をして化学の発展に貢献してきた。19世紀後半に、化学品の工業生産技術の進歩に伴って製薬産業が形成されると、市中薬局の携帯は医薬品流通末端での配給機能のみに変化してしまった。

医薬についての歴史的基盤の異なる日本では薬剤師は存在しないまま明治維新を迎えた。岩倉使節団の帰国した翌年の1874年に新政府は医制を交付したが、薬学教育に関しては前年に第一大学区医学校製薬学科が設立されたばかりで、薬剤師不在の状態であった。その結果は1985年に医療法が改定されるまで、実質的に医薬分業は行われない状態が続いた。医療に重きを置く欧米の薬学とのギャップを埋めることが当面の課題である。

第五席は「長崎における薬剤師会の設立と活動」と題して永田修一氏(長崎市薬剤師会長)の講演で、長崎市薬剤師会は、明治23年11月に池口慶三により設立された。池口はこの年、東京帝国大学医学部薬学科を卒業したが、丁度、第五高等中学校医学部薬学科が設立されて、教授として赴任してきた。彼は明治26年には千葉の第一高等中学校医学部薬学科へ転勤した。

(末廣 雅也)

## ◆報告

### 国際シンポジウム—医療薬学の歴史と文化—

本シンポジウムは静岡大学人文学部松田純教授の平成19年度科研費“薬の倫理学と薬剤師の倫理教育プログラムの構築および薬の歴史文化論的プロジェクト”の企画の一つとして、去る2007年9月15日(土)10:30から17:00まで午前1題、午後2題の発表が静岡市産学交流センター7階の大会議室で行われた。

松田教授は倫理の専門家であるが、薬学が6年制となった今日、薬剤師の倫理教育を如何に行うべき

かについて種々の提言をされている。

当日のシンポジウムは3題とも英語またはドイツ語で行われ、各演題についてフルテキストと完全な訳文(A4各40頁)が出席予定者に2週間前に配布され、外国人3名を含む45名の専門家によるシンポジウムであった(薬学関係者は筆者を含め4名)。

午前の講演者はドイツ連邦文部科学省生命倫理学研究主任 Dr. Dirk Lanzerath で、「病気という概念がもつ規範的な機能と人間の生活世界の医療化：人体改造技術と「エンハンスメント」は人間の未来を決定するか」という題で、ドイツ語で50分の講演、質疑30分があった。質疑は通訳を通じて行われた。

「エンハンスメント」とは松田教授により「人間の能力の増進的介入」と訳されている。人間改造技術という手段は狙った目標を達成するのにふさわしいものであろうか、介入はどの程度不可逆で、どんなリスクを孕んでいるのかについて説明した。また同博士はドーピング、脳エンハンスメント、遺伝子エンハンスメントは医薬の倫理と社会を将来一層悩ますことになり、ヒトは人間改造技術による「第二の健康」を受け入れるようになるかも知れないが、その時生ずる問題は誰が費用を支払うべきかというのとは本質的にまったく違ったものになろうと結んだ。

午後の第一の講演は、スイス・ローザンヌ大学、Denis Renevey 教授による「中世医療文化の Heteroglossia: イングランドにおける病気と治療に関する言説の多様性」と題して英語で50分の講演、討論30分が行われた。

同氏は中世ヨーロッパにおける文学と医学の接点を探り、病気の解釈に用いられた heteroglossia(多様な言語、表現、言説)について検討を加えた。

その例としてミラノ生まれのランフランコによる外科大全(c.1295-6)をとり上げ、同書の外科医の描写は、大学医学部で教育を受けた内科医と同等の地位を得ようとした外科医の願望を示した heteroglossia であるとした。もう一つの例はイギリスの詩人ジェフリー・チョーサー(c.1340-1400)の「トロイルスとワリサイデ」に関するもので、トロイルスの健康回復への望みはパンドルスが医師の権威である言葉を用いて他人を支配しようとした過去を明示していると述べ、中世の heteroglossia の1例であると説明した。その他、ペストがまん延した際、医師たちは手をこまねいて見ているばかりだったという事実が病や治療に対する多様な言説を生み出したと結んだ。

最後の講演は筆者が「薬師如来像と薬壺と日本人の祈り」と題して英語で50分の講演、質疑30分が行われた。日本の薬剤師、医師にとってもっとも重要な仏は現世利益の薬師如来であり、国宝・重要文化財として登録されているものは259像、またそのうち200像が左手に薬壺をもっていることを明らかにした。200像のうち周防国分寺の薬師如来像の薬壺(元禄12(1699)年10月12日の銘)の中にのみ内蔵物を含み、筆者らが分析した結果、生薬5種、穀物5種、鉱物6種を含むことを明らかにした。従って当時の住人が同薬師如来像に病気の回復と豊作と御利益を祈ったことが明白になった。

一方、2003年の統計によると、仏教を信ずる日本国民は全体の33%、神道4.2%、キリスト教1.2%、他宗教5.6%、不明3.4%、残りの52.6%は無宗教者であると報告されている。人々は幸福になると宗教から離れるといわれているが、今後老人が増加し、薬師如来を信仰する人は増えるのではないかとアンケートに対する意見を述べた。

日本の薬学教育は6年制となり、物質薬学教育から臨床薬学教育へその主流が移りつつある。そのため薬剤師は患者に対する薬のみでなく、患者の人的背景、文化にまで配慮することが求められている。今度のシンポジウムの首題はエンハンスメント、heteroglossia、薬師如来への信仰という、一見別々の話題であったがいずれも患者の心の問題であり、薬剤師の人文科学、倫理学に関する問題を含むので、薬剤師にとって必須なこれらの問題を、今回のシンポジウムのように文学部の先生方と合同の研究会を

開催して学んで行く必要性を痛切に感じた。

(奥田 潤)

## 日本の医薬品産業の誕生から今日まで—雑感

山川 浩司

筆者はかつて本会の創立四十周年記念事業の「日本医薬品産業史」<sup>1)</sup>に、「日本医薬品産業の特質」と「日本医薬品産業現代史」を書きました。19世紀にドイツを中心とした医薬品産業の設立から数十年遅れでアジアに日本だけが近代科学化の道を歩み、その後、日本の医薬品産業がどのような発展の道を通ったのか、私が提唱する1970年代からの第四次医薬革命期<sup>2)</sup>の初期には日本の新薬の黄金時代をつくり、短期間の間に日・米・欧の3極をになう近代医薬品産業をなぜ建設できたのか。「それが画期的な新薬の研究開発に再び遅れをとり米国に差をつけられているのはなぜか。最近、吉森賢編「世界の医薬品産業」<sup>3)</sup>の6章、姉川知史「日本の医薬品産業」に過去60年間の日本の医薬品産業についての成功と失敗の2つの側面が記述されている。また、21世紀に入って平成14年8月に厚生労働省の「医薬品産業ビジョン」<sup>4)</sup>が説いていることが正論なのか。五年後の平成19年8月に「新医薬品産業ビジョン」を公表したが、この五年間で進展が見られず現状は危機的状況にあると説いている。

ヒトゲノム解読に日本で優れた科学技術が開発されていたのに、日本では技術としてしか評価せず、この技術は米英でゲノム解読に採用されて発展が計られて成功を収め日本の貢献度は6%に留まってしまった。日本の科学技術の評価の誤りであり国の科学行政の失政であった<sup>5)</sup>。今日、科学技術立国を目指す日本で科学技術が正しく評価されなくなっていることに問題があるように思う。医薬品製造では後発の中央ヨーロッパ諸国、韓国、中国、シンガポール、インドなどからの低価格な医薬品およびその原料または中間体が生産供給される体制に依存する傾向にあります。これらについて雑感的な展望してみたいと思います。

### 有機化学がドイツで誕生、有機化学工業は英国で成立

動植物・鉱物を資源とする化学物質が医薬品として製造され、医療に使用されたのはヨーロッパでした。アラビアの錬金術の技術を受け継ぎ植物、動物、鉱物を資源として化学物質を手にすることに成功したからです。この技術には物質の抽出、蒸留、精製にフラスコ、レトルトなどの吹きガラス器具が使われました。これらの錬金術工房を今日でもヨーロッパ各地の薬博物館などで見ることが出来ます。

薬史学会では数回にわたりヨーロッパ各国の**医薬史蹟の旅**を行いました。この旅で幾つかの薬博物館で錬金術工房の展示を見ることが出来ました。**第一回・英国、フランス医薬史蹟の旅**(1992年5月23~31日)では、ロンドンの英国医薬史博物館、英国薬剤師会館資料室、パリ市のパリ病院博物館、パストゥール記念博物館。**第二回・ドイツ医薬史蹟の旅**(1993年5月5~13日)とハイデルベルク国際薬史学会議では、ハイデルベルグ市の薬博物館、ダルムシュタット市のメルク社博物館と工科大学のケクレ記念室、ギーゼン市のリーピヒ博物館、インゴールシュタット市のドイツ医学史博物館、ミュンヘン市のドイツ科学博物館。**第三回・北欧医薬史蹟の旅**(1994年6月19~28日)では、ストックホルム市のスウェーデン薬剤師会博物館、ベルセリウス博物館、スカンセン野外博物館内のシェーレ記念薬局、ウプサラ市の大学博物館、図書館と解剖学講堂、リンネ植物園とリンネ記念館、コペンハーゲン市のコペンハーゲン医学史博物館。**第四回・欧州医薬史蹟の旅**(1995年9月28日~10月6日)とパリ国際薬史学会

議では、パリ市の医療史博物館、パリ大学薬学部博物館、オテルデュー病院博物館、ブリュセル市の現代医科学博物館、ライデン市のライデン大学医学博物館と植物園、ブルハーヴェ博物館、国立民族学博物館、ゴータ市の修道院薬局博物館、コーリンヘム市の薬局資料室、第六回・イタリア医薬史蹟の旅(1999年10月19~28日)とフィレンツェ国際薬史学会議では、ポローニア市のポローニア大学解剖学教室、バドバ市のバドバ大学医学博物館、ミラノ市のダ・ヴィンチ科学博物館などで錬金術のガラス器具類を多数見ることが出来ました。これらには復元展示されているものもあるでしょうが、化学ガラス器、蒸留器、ろ過器など、これほど多数のガラス器が残されているとは思いませんでした。勿論、これらのヨーロッパの医薬史博物館でも見事に彩色された多数の陶器の薬壺が展示されていましたから、薬を保存する容器としてこれらの見事に彩色された陶器製の薬壺は大事に扱われていたと思います。しかし薬の実験器具としてはガラス器具が使われていました。

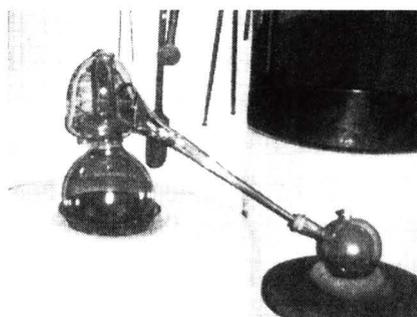
これに対して第五回・中国医薬史蹟の旅(1996年10月12~24日)では、中国の四大医史博物館(北京、陝西、成都、上海)および北京市の中医薬大学博物館、成都市の成都中医薬大学博物館、杭州市の故慶余堂博物館、耀県の薬王山博物館、上海市の上海中医薬大学医史博物館および童涵春堂資料室などで中国医薬史蹟の展示物を見学しましたが、いずれでもガラス実験器具類は見られませんでした。岐阜の内藤記念くすり博物館も含めて医薬史博物館で見えるものは陶磁器製の蒸留器や実験容器です。

#### 化学器具がガラスか陶磁器で化学の近代科学の成立を分ける

中国でも日本でも古代からガラス器、特に吹きガラスの製作技術が無かったわけではないと思います。岡山での薬学会の折、市内のオリエント美術館で古代に製作された内外の吹きガラス器を見ました。しかし中国、日本の錬金術技術ではガラス器を使用せずに陶磁器を使用したものと思います。オリエント美術の権威の杉山二郎<sup>6)</sup>は、日本人はガラスに対してタブー感を持ち親近感を持っていなかったと述べている。蒸留器の蘭引きや液体を入れる容器などいずれも陶磁器製で、中には見事な花模様の絵付けをした美術工芸品のような器具も見られます。錬金術師たちは化学物質の製造に持ちうる器具類には実験的要求を充たすものであれば良く、形の外には美的な要素の必要と考えなかったからと思います。

私は西洋人と東洋人の用いた化学実験器具の違いは、東洋人の美意識の違いがその後の近代化学の成立を左右した一要素と考えています。欧州の化学者(当時は未だ化学者と呼ばれる者はいませんでした)は気体を逃さずに捕集できるガラス器具を使用したために気体を捕集することが出来て、また重量を秤量する精密な天秤がつくられたために、それらの気体の研究から定量的な研究ができて、酸素の発見、質量保存の法則などが発見されてフロジストン説から脱して近代化学が確立することができました。定量的に物事を考える習慣が身に付いたともいえます。東洋での物質の取り扱いからは気体を捕集することは出来ず、精密な天秤が無く物事を定性的に捉えるだけで定量化の概念が育たなかったために近代化学を確立することは出来なかったのです。このような考えに至ったのも数回にわたる内外の医薬史蹟の旅での見聞によるものです。是非、国内および諸外国の医薬史蹟について多くの見聞を深めてほしいと思います。私の著した「国際薬学史—東と西の医薬文明史」南江堂(2000刊)<sup>2)</sup>でこのことを論じました。この本は一般の薬学史の本と異なり薬学革命や技術革新についての多くの記述で論じています。多少、独善的であっても著者の独自の考えを盛り込みたかったからです。歴史は過去の事績をどのような立場からどのように見るのかにあります。一度、批判的にお読みいただきたいと思います。

ヨーロッパのガラス器は一般的にはガラス素材のままです。絵付けされたガラス器が製作されたのは19世紀の後半から隆盛したエミール・ガレらのアールヌーボウのガラス器です。諏訪湖畔の何遍か訪れた北沢美術館で多数のガレ製作のガラス工芸品を見ることが出来ます。この美術館に見られるアールヌーボウのガラス器が製作されたのは、ナンシー派が活躍した地域がガラス資源の産地であったことを示



(a) 錬金術の蒸留器(ガラス製)  
(ハイデルベルグ・ドイツくすり博物館、著者撮影)



(b) 蘭引：中東東洋の蒸留器  
(内藤記念くすり博物館提供)

す展示があり、学芸員の方と話し合い納得できました。日本でも現在はガラス資源に恵まれた地域ではガラス工芸品の生産は盛んです。小樽の北一硝子や各地方の離島でガラス工芸品が作られています。江戸時代の薩摩硝子、長崎ビードロ、江戸切子などが幕末には生産されていました。しかし江戸期の職人には素硝子の容器よりも装飾硝子が好まれたように思います。

私が東大薬品製造学の菅澤重彦研究室で学んでいた戦後の時期には、現在のような硬質ガラス器は無く実験の合間に仲間たちはガスバーナーのところに集まり、競ってガラス細工で小さいフラスコ、分岐管、攪拌棒などの製作に励んでいました。また薬学の屋上にガラス職人の桐山弥太郎氏(後に桐山製作所として独立)がガラスの実験器具の製作をしていましたから、ガラス細工のコツについていろいろ学ぶことも出来ました。化学実験は技術の巧拙に支えられていますから見合った実験器具が欠かせません。しかし現在の硬質ガラス器は高温でないと細工できませんから専門職に依頼しなくてはならなくなりました。

#### 錬金術からドイツの石炭資源をもとに近代有機化学へ

大分脱線が長くなりました。薬物研究はアラビアからヨーロッパ諸国に伝えられた錬金術技術によることに移り、19世紀になって植物性薬物からドイツ、フランスの化学者によってモルヒネ、キニーネなどのアルカロイドが単離されました。フランスのゲールサックの下で化学を修得したドイツのリービッヒはギーセンに戻り化学実験室を建設しました。(現在、この化学実験室は復元されてリービッヒ博物館となっています、この博物館はドイツ医薬史蹟の旅で訪ねました。)この実験室には世界各国から俊英が集まり多数の有機化合物が作られました。これらの有機化合物を官能基の性質により分類して有機化学が体系化され、リービッヒ学派の人々を中心として有機化学が築きあげられました<sup>6)</sup>。石炭を資源とする炭素の化学としての有機化学の建設は、ドイツ北西部のルール地方に石炭資源地帯があったことによるものと理解できます。第二次世界大戦でドイツが連合国に降伏して欧州における戦争は終結しました。敗戦国のドイツは復興に努め比較的早く驚異的な復興を成し遂げることが出来たのは、このルール工業地帯の被害が少なかったことによっています。日本でも戦時中に石炭からのタール資源の有効利用として、主として薬学の人々により含窒素複素環化合物の研究が華を開きました。また戦後は石炭生産に重点を置いた傾斜生産方式で、日本経済は敗戦から立ち直り驚異的な復興を遂げることが出来たのです。

#### 医薬品産業の誕生から医薬品の開発へ

ドイツで成功した有機化学を英国に導入するためにリービッヒの高弟のホフマンを英国に招き、英国で有機化学の研究教育が行われました。教えを受けた一人に英国のパーキンがいます。彼はホフマンの指導で有機化学を修得してアニリンからアニリン染料のモーブを合成しました。1856年にパーキンは

このモーブ染料の特許を取得して工業化することに力を入れて成功しました。産業革命が英国で起こったことから、化学に立ち遅れていた英国で最初の有機合成工業が建設されたことは英国の産業革命の伝統ともいえます。しかし染料モーブの本体は不明です。工業化してもこのような状態では進歩発展は望めず行き詰まってしまう。パーキンは思い直して有機化学の基礎からの研究実験を始めました。その成果から多数の英国のパーキン学派の有機化学者が輩出されたことに示されています<sup>7)</sup>。ホフマンは英国からドイツに戻り有機化学研究指導に力を入れました。日本から長井長義などがホフマンのもとに留学して帰国後に日本の有機化学を建設したことは良く知られています。日本の化学を建設した人々がリービッヒおよびパーキン学派に見られます。

化学の学術誌が発刊されたのは英国で Journal of The Chemical Society(1841 年創刊)で国名は明示されていません。現在、最高の化学の学術誌とされる Journal of the American Chemical Society は 20 世紀の半ばまでは二流誌でした。当時の論文の記述の正確さからも分かります。当時の最高の化学学術誌はドイツの Annalen der Pharmazie、1832 年創刊、Annalen der Chemie und Pharmazie に 1840 年改編および Berichte der Deutschen Chemischen Gesellschaft(1868 年創刊)でした。リービッヒが薬局の息子であったことから化学にのめり込む時に薬学への関心が深かった事と分かります。日本では東京化学会誌(1980 年創刊)、薬学雑誌(1981 年創刊)が発刊されました。日本の学術誌の発刊がかなり早かったことが分かります。

リービッヒ一門の人々の中から 19 世紀の半ば以降に多くの植物資源や石炭タールを資源として染料や医薬品の製造工業がドイツ、フランスで設立されました。これらの工場では多数の有機化合物が合成されると共に、これらの有機化合物の生理活性を調べる試験室が工場内に建設されました。このドイツで北里柴三郎の弟子の二人の日本人が活躍したことは特記されることです。エーリッヒのもとに留学した志賀潔(仙台市の勾当台公園に胸像があります)によるトリパン赤とトリパン青の色素療法剤の開発、その後留学した秦佐八郎による梅毒の特効薬サルバルサンの開発です。ドイツの色素染料から色素療法薬やスルホンアミド抗菌薬など見出されて化学療法剤が製造されて一世を風靡しました。ヘキスト化学会社におけるアゾ染料からスルファミン誘導体の合成抗菌薬の成功はこの成果によります。

研究室医学を標榜するドイツ、フランスでは化学者と医学研究者が協力する体制が作られました。化学、製薬工場施設の内部に化学化合物の薬理活性を調べる研究施設を設置しました。しかし日本の化学工業や製薬工業は生産一辺倒で大きな違いになっています。ドイツから化学と製薬工業を学んだのに、なぜこのような体制を日本は学ばなかったのでしょうか。四日市の石油化学コンビナートの公害が問題になった時、日本の化学工業には安全性を調べる動物実験研究室を設置している企業はありませんでした。また製薬工業にあっても中央研究所に有機化合物の合成研究と製剤の研究試験室は設置されましたが、動物実験施設や安全性試験施設が設置されたのは主として 1970 年代以降のことです。このような事からも日本の製薬工業はドイツの製薬工業との設立の思想が基本的に違うのです。20 世紀の日本の大学の薬学研究もこの影響を反映しているといえます。このことについては日本における社会的な背景があったからです。改めて考えてみたいと思います。

#### 長井長義の麻黄の有効成分エフェドリンの分離構造決定の研究が示した教訓

薬学六年制改革の「六者懇談会」の議論の時、国立大学の代表者は長井長義先生の喘息治療薬のエフェドリンの発見は日本の薬学の誇るべき創薬研究の成果と発言されました。この事例は日本の医薬品産業としては惜しむべき事例と考えます。長井先生が活躍期にあった時に衛生試験所の山科元忠技師が大日本製薬(株)に出向して、漢薬麻黄の成分研究に着手して粗製物を得ていました。しかしそれ以上の研究に進めずに難航している時、長井先生の指導でこの仕事は山科の急死後、後任者の堀有造に引き継が

れて1887年にエフェドリンの化学構造の決定と化学合成という輝かしい仕事が行われました。

このエフェドリンの薬効効果は東大医学部薬理の先生方に委託されましたが、瞳孔拡大の作用以外に効果を見出すことが出来ませんでした<sup>8)</sup>。東大医学部では薬理学の研究が始められたばかりの頃でしたから止むを得ないことなのかも知れません。東大薬学科は医学部の傘下にあったので薬理学の講座も教育研究も行われていませんでした。また、この研究を支援する立場にあった大日本製薬(株)でも薬理試験などは全く行われませんでした。薬学の分野で薬理学の教育研究が行われるようになったのは、太平洋戦争の敗戦後に米国薬学使節団からの勧告後のことです。欧米の薬学教育とは大きな違いです。長井によるエフェドリンの研究その後37年も放置され、1924年に陳とSchmitによってエフェドリンの構造がアドレナリンに類似することに注目して、エフェドリンの薬理実験と臨床試験が行われて喘息に効果がある医薬品として見いだされました。陳は中国最高水準の北京協和医科大学の出身です。この医大は現在の中国で最高に難関な大学といわれる清華大学や北京大学よりも難しい大学との事です。

エフェドリンの医薬品の価値が認められると、その合成法は長井により明らかにされていきましたから、大日本製薬(株)で国産化製造は直ちに行われ、エフェドリン(ナガキ)として1927年に発売されました。日本は20世紀の後半まで製造特許制度を採用していましたが日本の製薬産業は製造法の研究に重点が置かれました。この医薬品開発路線は製造法特許を獲得する路線となりました。現在のような医薬品特許制度になると基礎研究から臨床治験までに優先権が認められ、日本の製薬産業は苦戦を強いられるようになりました。日本の薬学に新規の有機化合物の単離、構造決定をして、その薬効を実験薬理学的研究と臨床医学的な研究体制と医療機関で患者の疾病に有効性を確認できる創薬の治験体制が早くからつくられていれば、長井先生の活動期にエフェドリンの医薬品の効果が見出され、それこそ日本の薬学の創薬の成果と誇ることが出来たのです。本質的な創薬研究体制が重要で残念であったと改めて思います。

#### おわりに

かつて日本医師会のドンと言われ医薬分業に強力に反対された武見太郎は「薬学にはフィロソフィーが無い」と批判されました。どのような意味で言われたのか私は知りませんが、病院薬剤師にとっては医師の指導下に置かれ、百年を越えて医師法の傘の下にあって薬剤師は医療に直接参加できず身動きができませんでした。大学医学部付属病院の薬局長は長く医学部助教授でした。重い呪縛であったと思います。薬学教育、薬剤師教育改革の機会に、市民の健康に奉仕する「医療の担い手」になるために、これらのことを再考してほしいと思います。

2007年9月から日本薬学会は5回シリーズで「薬学界懇話会」を開催しました。日本の新薬の研究開発戦略から薬剤師、薬学教育研究まで幅広く考えるための戦略と戦術を企画して実施され、多数の人々が危機意識をもって参加されました。この会で日本の臨床基礎研究と国際共同治験の遅れを教えられました。薬学の諸分野での動向を歴史的な洞察力をもって考えることが本会の会員に求められていると思うのです。

#### 参考文献

- 1) 日本薬史学会編：日本医薬品産業史、薬事日報社(1995)
- 2) 山川浩司著：国際薬学史—東と西の医薬文明史— 南江堂(2000)
- 3) 吉森賢編、世界の医薬品産業、東京大学出版会(2007)
- 4) 高山昌也、薬史学雑誌、38、134(2003)
- 5) 岸宣仁著、ゲノム敗北、ダイヤモンド社、(2004)
- 6) 杉山二郎著、オリエン特考古美術誌、NHKブックス(1981)

- 7) 文献2の表5-7(73頁)リービッヒ学派の人々 および 表5-8(74頁)パーキン学派の人々  
8) 宗田一著、近代薬物発達史、143頁(1974)；大日本製薬(株)、薬史学雑誌、29, 241(1994)。

### 薬史小こぼれ話(1)

2007年10月に「外郎・透頂香と江川酒—日本最古の売薬と伊豆最古の醸造酒—」という新書を出版した。後北條早雲は伊豆の国主として君臨するや、関東開発の足掛かりとして京都から、当時、先進技術の先駆者である製薬技術者、醸造工学者を招いた。

早雲は、最初の領国伊豆を占拠した1495年位から彼らを伊豆韭山、三島の周辺に住居させて、徐々に領国の拡大に伴って彼らを相模・小田原、鎌倉、武蔵・江戸等に配置した。その所謂職人衆の数は、夥しく多数をかぞえるが、その技術者の種類は大体永禄2年(1561)に作成されたと観られる各被官(家来)の主家に対する役務高を貫目で表した「小田原衆所領衆役帳」が残っていて、そこに各職人の役務が明記されている。製薬・酒造は別としてその代表的な物は次の如きのものである。それは室町・戦国期に開発された技術を担う人達で、彼等無しには関東の近世日本の科学製造技術基盤は成立しなかったものである。主な役務は鍛冶屋集団である。鍛造・鑄造技術、鉄砲、大砲、刀工等が含まれる。唐昏製造、番匠・大工集団。大鋸引(巨材から大きな船板等を切り出す技術、これにより船は丸木船から構造船になる)。皮革職人、らでん師、刀の柄細工師、石切(石造)職人、銀細工師、紙漉師、結桶師(10~20石入りの桶が出来、酒の大量製造を可能にした)、鳥居の桁製造職人。組壺師と言うのは不明だった。著者の追跡によれば江戸時代縄張師と言われた、城の建物、空堀、土塁、石垣等の総合設計士で、組壺師(そじんし)と呼ぶ。例えば武田氏の山本勘助等は組壺師と呼ばれても良い。

### 薬史小こぼれ話(2)

著者は、長いこと売薬「透頂香」を追跡してきたことは知る人ぞ知るところであるが、ところで日本の熟語に古くから「頓珍漢」と言う言葉があり、「広辞苑」によれば鍛冶屋の相槌「とんちんかん」から来たのが語源で、訳の分からぬうすら馬鹿を言うとしている。

小生は、これに長いこと疑問を持ってきたが室町時代に売り出された「透頂香」がその語源であると信じている。「透」は中国語でTOUで容易にTON Tongに変わり易い。事実当時そのように呼ばれていた。「頂」はTINでそのまま呼び易い、「香」は中国呼びでHONでこれはHANに似て発音される。香港を日本人は気取ってHANC KONGと呼ぶ。当時の中国人は普通漢人(HAN REN)と言い、日本人は「かんじん」と発音した。KANJINである。合成すれば「とんちんかん」である。始め日本人は訳の分からぬ薬と言うので「とんちんかん」と呼ばれた。恐らく外郎は始め「とうちんはん」と薬をひろめたが、日本人の呼びやすい「とんちんこう」または俗称「とんちんかん」と発音して売薬人の便宜に追随したのであろうと推測する。「外郎」も中国ではWAI RANであるが日本人が発音し易いようにUI ROUと呼ばせるのもその例証である。14世紀に来日して室町期には連歌(独吟千句)や狂言(膏薬練り)にいろいろ、とうちんこうと世間に通用させるとは、ともあれ当時の外郎の宣伝の工夫には感服せざるを得ない。

(2007年11月 杉山 茂)

◆北海道支部だより

## 平成 19 年度合同学術集会 (第 2 回) の報告

吉 沢 逸 雄  
(北海道支部事務局)

北海道における医・薬史学愛好家の 2 団体(北海道医史学研究会及び当会北海道支部)のジョイントで開催する「合同学術集会」、その第 2 回目が本年 9 月 15 日、札幌市教育文化会館で開催されました。前回の開催(19 年 1 月 27 日：薬史レター第 45 号参照)から日まだ浅いにも拘わらず、一般講演が前回並みに揃い安堵した次第、その概要をご報告します。

① 特別講演

寛政 11 年の蝦夷地採葉使と「蝦夷草木腊葉帳」

秋月 俊幸(元北大図書館)

② 一般講演

1. ホシ伊藤の創業者 伊藤経作の生涯(Ⅱ) - 星の組織とその業績 -

本間 克明(株北海道医薬総合研究所)

2. 北海道薬科大学創設胎動期の新事実(続き) - 新たな発掘資料 -

吉沢 逸雄(日本薬史学会、北海道医史学研究会)

3. アルギン酸の発見 英国特許 No.142

西沢 信(東京農業大学)

4. 関場不二彦著「西医学東漸史話」について(第 5 報) - 『外科』という呼称の由来について -

○秦 温信、松岡 伸一、大西 勝憲、関谷 千尋、佐野 文男(札幌社会保険総合病院)、  
島田 保久(元町整形外科)、鮫島 夏樹(旭川医科大学)

5. 農業機械災害撲滅の執念 - 伊藤紀克の終わりなき闘い -

古屋 統(NPO 法人 北海道安全衛生研究所)

6. 蝦夷地の医療(Ⅰ)

島田 保久(元町整形外科)

特別講演は、寛政 11 年、江戸幕府が渋江長伯を採葉使とする大掛かりな調査隊を蝦夷に派遣した際、隊員たちが残した紀行日記や採集植物の写生図・記録のほか、画家谷元旦の風景・風俗画などの紹介と考察から成り、格調の高さと学問の奥深さを感じさせるものでした。

一般講演も北海道に関連する内容の報告ばかり、何れも歴史が身近に感じられ、「自分もやってみようかな」とモチベーションに駆られるのではないのでしょうか。出席者は 31 名(当支部=20、医史学会=10、他=1)で、前回に比べ大きな減少です。生憎、当日は諸会議の開催と重なった会員も多かった由、反省材料です。終了後は、お決まりの懇親会(参加者 28 名)、和気あいあいの中での歴史談話、楽しいひと時でした。

(以上)

## 韓国医・薬史学博物館見学ツアーお知らせ

奥田 潤理事(名城大学名誉教授)のお世話による韓国ソウルの医・薬史学博物館見学のツアーの企画の連絡が寄せられたのでお知らせします。

期 日：2008年5月27日(火)～5月30日(金)

旅 程：第一日；午前 空路、ソウル空港着、ソウル市内ホテルへ  
午後 国立中央博物館、ホテル泊

第二日；午前 ホテルで朝食後、韓独薬品博物館見学  
午後 見学先は調査中

第三日；午前 ホテルで朝食後、許浚\*記念博物館見学  
午後 延世大学医学博物館見学、ホテル泊

第四日；午前 ホテルで朝食後、ソウル大学医学部博物館見学  
午後 仁川空港より空路帰国

見学先については薬史学雑誌 41巻2号96頁(2006)、

\*42巻1号46～49頁(2007)を参照して下さい。

1. 航空料金およびホテル料金が未発表の為、ご旅行代金は未定です。2008年2月～3月頃にご案内できる予定です。

(昨年同時期の概算参考料金 16名参加の場合 ホテルシングル利用 成田発お一人様 約140,000円)

\*上記の概算参考料金は今後変動することがあります。

\*発着地は成田、名古屋(中部)です。発着地により若干料金が異なります。

2. ソウル到着後の見学、帰国時の団体による移動は専用のバスで上記ツアー料金に含まれています。
3. ホテルでの3回の朝食も上記ツアー料金に含まれています。
4. 別途、空港利用料、燃油サーチャージ、航空保険代が必要です。
5. ご参加希望の方は、2008年2月29日までに下記の要領でご連絡ください。

旅行会社担当者より折り返し詳細をご連絡します。

「韓国薬史学ツアー」とご記入の上、ご氏名、TEL、FAX、E-Mail、パスポート記載のローマ字スペル、性別、発着地のご希望(成田または名古屋)をE-mailまたはFAXでお知らせください。

連絡先

株式会社ウエブトラベル 担当：深山(みやま)

E-mail：miyama@webtravel.jp

FAX：020-4623-5982

電話でのお問合せ先：070-5601-0505(担当者直通：平日9:30～18:30)

ご旅行申込後の契約は、(株)ウエブトラベル(国土交通大臣登録旅行業第1757号)と結んでいただきます。